

生の哲学の彼方

プロジェクト・ベルクソン・イン・ジャパン 第三回国際シンポジウム

第一日：形而上学

(2009年10月23日(金)、於：法政大学(市谷キャンパス)・ボワソナードタワー26階)

セッション1：開け(10:10-12:40)

フレデリック・ヴォルムス(リール第三大学、フランス)

「開放、ベルクソンによる形而上学と道德の基準」

ベルクソンによる基準としての開放と開放の基準をあわせて分析することにしたい。すなわちベルクソンのなかで『創造的進化』から『道德と宗教の2源泉』にいたって一開放が決定的な重要性をもって、形而上学と道德(そして宗教)の真理基準になるだけでなく、それこそ開放を定める基準である2つの重要な条件をもつことになるわけを示すことにしよう。決定的な重要性。なぜなら道德と形而上学における閉じたものと開いたものの区別は、当の思想だけでなくその時代をも方向づけていたからである。[2つの]条件。なぜなら開いたものは閉じたものから常に区別しなければならない(すべてが開いているわけではない)だけでなく、その「開いたもの」がからっぽの空間イメージになり下がると、開放が世界と歴史のなかに何かを逃がしてなお保ち続けているはずの、行動的で解放的な意味を失いかねないからである。(訳 松浦宏信)

合田正人(明治大学) 「スピノザ変化——ベルクソン／サルトルの場合」

スピノザほど毀誉褒貶の激しい哲学者はいないと言え、大方の同意を得られるだろう。しかし、このことは、かつてウルフソンの『スピノザの哲学』の書評でレヴィナスが述べたように、スピノザの大いなるアクチュアリティを成し、彼の哲学の影響力の途方もない大きさを証示している。だからこそ、ヘーゲルは「哲学しようとするば、まずスピノザ主義者にならねばならない」と言い、ベルクソンもまた、「すべての哲学者が二つの哲学を持つ、スピノザの哲学と自分の哲学を」と記したのだろう。

さながら影のように、スピノザはすべての哲学者たちのかたわらに立っている。いや、実を言うと、並立はしばしば知らぬ間に内含に転じ、スピノザの思想は、それとまったく相容れないと見える学説の中心に住まうことになる。デリダやナンシーは「ハイデガーにおけるスピノザの締め出し(forclusion)」を語っているが、「締め出されたものはより強くドアをノックする」(クロソウスキー『サド、わが隣人』)のである。

では、ベルクソンによるスピノザ読解はどのようなものだったのだろうか。本発表では、「意識」をスピノザ的「実体」に譬え、「様態」による「実体」の「表出」のごときものとして「実存的な精神分析」を捉えたサルトルの事例を手がかりに、また、ラニョー、ブランシュヴィック、アランにも触れながら、直観と実体、実体と持続、心身平行論、能産的自然、イスラエルの預言者たちといった諸問題に関して、スピノザの影をベルクソンの諸著作から読み取っていく。

村山達也(慶應義塾大学) 「『二源泉』の一つの源泉」

この発表の目的は、『笑い』において用いられている方法——それは、『創造的進化』で彫琢された生命についての考え方に支えを見出しつつ、『道德と宗教の二源泉』においても活用されることになる——の特長を浮き彫りにすることである。本発表では、ベルクソンを後期ヴィトゲンシュタインや戦後フランスのヌーヴェル・クリティック(とりわけリシャールとスタロバンスキ)と比較することを通じて、この作業を行うことになる。

セッション2: 知性の余白で——『創造的進化』から『道徳と宗教の二源泉』へ(14:30-17:30)

※デボラ・モラート=ピント(サン・カルロス連邦大学、ブラジル)は急病のため来日できなくなりしました。

神山 薫(西武文理大学) 「無意識の創造」(仮題)

昨年度に引き続き、ベルクソン哲学における「無意識」の「主題と変奏」を取り上げる。(前発表において)既に明示したように、同主題は、ベルクソン哲学全体を(底流のように)貫く根本的主题として機能している。今年度の発表では、『進化』から『二源泉』への展開に焦点を絞り、この過程における「創造」概念の変様ないし拡張の具体的な内実を概観する作業を通して、<創造の哲学>における「無意識」の主題の意義を確定することを試みる。

谷口薫(四国大学) 「『二源泉』における仮構機能と知性」

ベルクソンの思索の発展をたどっていくと、『道徳と宗教の二源泉』では、知性にはそれまでの著作とはやや異なる役割を見出すことが出来る。『二源泉』以前には、知性は、創造のエランを捉え損なうものの、事物などの物理的なものについては、科学的知識や数学的体系を構築することが出来るように、私達の行動を導くための適切な理解を獲得するものと位置づけられてきた。ところが『二源泉』では、知性は、事物世界についてさえも非合理的な迷信や偶像視を行うものとしてクローズ・アップされる。第二章における静的宗教と仮構機能の議論である。本発表では、この仮構機能を考察することで、『二源泉』の知性には、人間関係を結び人格的な存在に向き合うという、新しい可能性が与えられていることを明らかにしたい。

アルノー・フランソワ(トゥールーズ第二大学、フランス) 「ベルクソンの超人論」

本発表の目的はベルクソンの超人論を検討することにある。これは、『創造的進化』において最初に、ただ一度だけ、定式化されて以降、『二源泉』における神秘主義論の只中で再び取り上げられ、同時に深い変容を見せるものである。ニーチェと逐一对照させる予定である。(訳 渡名喜庸哲(となき・ようてつ))

第二日: エピステモロジー

(10月24日(土)、於: 法政大学(市谷キャンパス)・富士見坂校舎1階遠隔講義室)

セッション3: 科学の彼方——生の科学哲学(10:00-12:30)

ピート・ギンター(ノーステキサス大学、アメリカ)

「ベルクソン、科学、その彼方: 生成的概念としての直観」

直観という概念は多くの意味を持っている。本発表では、それを三つに区分して、ベルクソンが直観を扱う際に用いた語の使い方に関連づける。三つの区分とは次のようなものである。(1) 合理主義的定義、(2) 反啓蒙主義的定義 (Obscurantist definitions)、(3) 経験主義的定義。明らかに、ベルクソンの定義は(論理的な自己明証性だけに基づく) 合理主義的なものではない。また、(何ら重要な考えや応用をもたらさない漠然とした諸観念からなる) 反啓蒙主義的定義でもないし、感覚や感覚与件にのみ限定されているという意味での経験主義的定義でもない(ベルクソンにとって経験はこうしたものよりもっと豊かである)。

対照的に、ベルクソンの直観は、(運動を含んだ) 変化の様式に綿密な注意を払っている。このような直観は、大きな幅を持っている。ベルクソンの直観は、人間の現実性を含む世界の多くの局面に対処するために用いることができる。また、さらに、その直観はそれ自体として認識論的に包括的でもある。つまり、ベルクソンにおける直観は、合理主義のように理

性的(noetic)な内容を含み、また経験主義のように経験的内容を含んでおり、この両方を新たな洞察の探究の中で結び合わせているのである。

加えて、ベルクソンの直観主義は、予感(hunch)のようなものを含んでいる。予感あるいは気づき(suspicion)は新しい場所へと導いてゆく。もしも私に何か新しい種類の数学が基礎物理の問題を解決するかもしれないという予感があるなら、私は、量子力学か、あるいは熱力学の調査を行い、そしてわかるかもしれない。もしも私がある学部長候補が才能ある管理者になるという考えを持つなら、私はその人を受け入れるために動くかもしれない。こうしたことは、いくぶん限定された例ではある。しかし、どのような事例に対しても、私が論じているのは、直観は新しい概念図式へと至る「生成的概念」として機能するということである。直観は袋小路ではない。それは新たな意味へと乗り出すための戸口である。

ベルクソンの直観概念はどこか新しいところへとたどり着いたのだろうか。それは何か今までにないような応用可能な概念図式を作り出したのだろうか。答えはイエスである。私はこの概念の成果のうち二つだけを引用する。それは、カレルとルコント・デュ・ヌイの生物学的時間の研究、そして世界人権宣言の定式化である。(訳 齋藤瞳)

エリー・デューリング(パリ西-ナンテール大学、フランス)

「実在的時間・普遍的時間・宇宙的時間:ベルクソンのコスモロジーの三つの次元」

ベルクソンは、「逆向きの心理学」(EC, 209)として構成されるだろうコスモロジーの計画を温めていた。三つのイマージュが、その計画の主要な方向付けをはっきりさせてくれる。すなわち、映写機・万華鏡・圧力鍋である。そしてこれらに「物の時間」の三つの規定が対応する。本発表は特に、測定された時間という新たな概念が『創造的進化』と『持続と同時性』の間で構成される仕方に、つまり、物質的宇宙の時間と全体の持続との分節化に関心を抱く。相対性理論を鑑みて練り上げられたこの「実在的時間」は、持続の「細分化」に対立する。それは、『試論』の「実在的持続」とすっかり、単純に一致する訳ではないが、かといって等質的・数学的時間と一つになる訳でもない。(普遍的時間から区別される)宇宙的時間に関して言えば、両義性は排せないものの、しかしその時間が不可逆性の現象を、「物理学の法則の中で最も形而上学的な」(EC, 244)熱力学の第二法則の独創的な解釈を通していかなる仕方で組み込むかが、示されることになるだろう。最終的に、ベルクソンのコスモロジーのこれら三つの次元から、全体あるいは全体性についての複数の意味を区別することが、そしておそらくは、全体化を行う複数の仕方、すなわち局所的なものから大域的なものへと移行する複数の仕方を区別することが、導かれることになる。(訳 中村大介)

永野拓也(熊本電波工業高等専門学校)

「『創造的進化』における理論的モデルと生命原理」

『創造的進化』は、熱力学の示唆する物質の傾向性を踏まえて、生命の方向性を、物質の傾向性に対抗する方向性として提示する。

だがこうした相補的な構造によって生命を語る上で、生命の、また不可逆性の契機を、ベルクソンのそうしたように非物質的な原理とみなさなくてもよいという議論が、近年の散逸構造論などに見て取れる。また現代の進化論哲学は、議論のもっともらしさという観点から、生命を非物質的な原理とみなすことを避け、物理主義に接近する。私たちの常識もおそらくこれと近い。

しかしベルクソンは、万能の切り札として非物質的な生命原理を持ち出すのだろうか。生命原理の意義は、進化の哲学という意味でも、ベルクソンの哲学という意味でも、もっと限局されているだろう。

平衡へ向かう物質の傾向と逆行する傾向性を理解するためにベルクソンが参照するのは、意識の生の自由・創造性である。ここからは、以下のような、進化論についての認識論的な批判の筋道を見て取れる。『創造的進化』は、生物についての理論を数理的な理論に還元し、かつ、数理的なモデル、特に力学の可逆的で機械論的なモデルの実在性の根拠

を、物質が空間を、平衡・安定な状態として目指す傾向性に求めた。モデルの実在性は、この傾向性とモデルとの類似にある。だが、物質の傾向性がモデルに相対的であれば、議論は循環し自閉する。これを避け、物質の傾向性をモデルの外の過程として示すために、ベルクソンは非平衡へと向かう傾向性を持ち出すと見ることができる。この方面に議論を展開する上で、ベルクソンには強みがある。

ベルクソンは、『創造的進化』に先立って、自由・創造として位置づけられる意識の生を、最初は数理的にモデル化されない現実として、次に数理的モデルを構成する力として理解しようとしている。この議論を進める上で、ベルクソンは物質について、確率論と相性の悪くない見方を提示する。つまり、意識の生がそれ自体の休止において自動的なプロセスを発動させ、自動的なプロセスの停止によって発動する、という、意識と物質との相殺と相補の関係である。そしてこの関係のもとで、自動的なプロセスを探る数理的モデルには、実践的な意義を持つ意識的知覚を拡張するという、実践的な役割が与えられる。

『創造的進化』に現れる自動的なプロセスのうち、微視的な物質運動の、反復、平均としての性格づけは先立つ著作から継承される。ただ、この微視的運動を極限として持つ、ひとつの傾向性が、それ自体としても自動的なプロセスであるとする、包括的な議論を展開するのは『創造的進化』が最初である。この包括的な構図のもとで、自由と創造性に、平衡に逆行し、平衡と相殺される瀬戸際で展開する生命、という地位が与えられる。生命としての自由と創造の実在性によって、逆行する平衡へのプロセスの実在性が示される。これによって、先立つ著作では実践的ではあっても実在的とは言い切れなかった数理的モデルに、実践的であるがゆえの実在性が授けられる。

散逸構造論とのベルクソンの相違は、彼が不可逆、散逸といったことを、すべて数理的モデルの構成者にゆだね、自動的で可逆的な過程を、このモデル構成者と相殺しあう関係に置くところである。数理的モデルの知識に関する時代的な制約によるところはあるが、ここには、当時可能だったベルクソンの哲学者としての射程が明白に出ているだろう。また、現代の進化論哲学の主張と比較するとき、ベルクソンにおいて、物質を利用し適応する非物質的生命原理が、物理的なモデルを構成する主体の性格を強く帯びることを確認すべきだろう。現代の立場と比べると、確かにベルクソンには、科学諸分野における実在論的な諸成果の連携から解決を引き出すのではなく、哲学がひとり決定的解決をもたらすことを望むところが多少はある。だがこの解決は、敢えて自然主義的な立場をとる点で、現代の進化論哲学と遠くない。また私たちが心理的な生を生きるものである限りは、十分に合理的と認めうる解決である。

セッション4:ベルクソンと科学史(14:30-17:00)

安孫子信(法政大学)

「デカルト化されたベルクソンとパスカル化されたベルクソン」(仮題)

ジャン＝ルイ・ヴィエイヤール＝バロン(ポワティエ大学、フランス)

「実験心理学が『創造的進化』に与えた影響」

ベルクソンが実験心理学を主に参照するのは、ドイツにおけるこの学問の父であり、優れた哲学大系の著者であるヴィルヘルム・ヴント(1832-1920)に関するものである。ヴントの並外れた著作は、フェヒナー(1801-1887)の自然哲学(*Naturphilosophie*)を引き継いでいる。ベルクソンの精神主義は、自然学そしてそこから生じる哲学を出発点としている。フェヒナーは、魂を精神的な力として規定するために、諸感覚を測定できると考える。ヴントは、外的・内的な観察にもとづいて、彼の偉大な生理学的心理学を打ち立てる。身体的、生物学的な基礎に立って、人間の魂を研究することが重要なのである。デカルトに由来する伝統的な精神主義は、ベルクソンを感覚や記憶にあまりに重要視しすぎるといって非難する。

しかしベルクソンは、この精神主義を身体と精神の対立をアプリアリに前提にしているとい
って非難する。生命の重要性は、生命が物質と精神の混合したものであるという事実のう
ちにまさにある。生物(le corps vivant)は、生理学によって研究されるが、それはある一点
まででしかない。ヴントの誤りは、決定論を一般化したことであった。決定論そのものは不
完全であり、生物の生命を説明できない。というのも、生命は心理学的な本性のものなの
だから。この意味で、ヴントの実験心理学と心理学主義がベルクソンの『創造的進化』に与
えた影響は、精神の自然哲学の基盤を整備したことである。科学哲学が、「拡張された科
学的経験における彼岸のヴィジョン(une vision d'au-delà dans une expérience
scientifique élargie)」になりうるのは、実験心理学と実験生物学に支えられることによって
なのである。(訳 松本力)

ファン・スヨン(ハルリム大学、韓国)

「ベルクソンとシモンドンにおける類と個体」

類の持つリアリティーの上に築かれた本質主義が失われて以来、類と個体との関係の
問題については語られなくなってきた。法則を構成する諸用語について考えてみると、
近代科学が類ではなく法則に基礎を置いているにもかかわらず、類は普遍的である限り常
に科学法則そのものにおいて働いている。その一方、生物種の根幹をなす類の概念は、生
物学における分類のシステムを認める限り、なお有効である。ところが、自然科学の現状
はこの問題に対して十分な解明を出来ていない。ベルクソンとシモンドンは、彼らの生成の
哲学において、種と個体の問題をそれぞれ独自の方法で検討している。この二人の哲学
者の思想が、いかに彼らが直面している科学の核心を反映しているのか、これを検討する
ことは非常に興味深い。我々の目的は、彼らの形而上学—エピステモロジーに関する著作
を現代の科学研究の成果と関連付けて、彼らの思想と我々の問題を比較検討し、またこの
二人を相互に比較することにある。(訳 小関彩子)

第三日:美学・政治

(10月25日(日)、於:明治大学・駿河台キャンパス 大学会館8階会議室)

※ビデオ・コンフェランスの時差調整のため、セッションが大幅に入れ替わっています。

セッション5:生命と政治(10:10-12:40)

宇野邦一(立教大学)

「イメージ、あるいは生きた物質」(仮題)

ジル・ドゥルーズの『シネマ』は、ベルクソンが提案したとおりのイメージの概念を採用す
ることから始まっている。しかしみずから「メタシネマ」と呼ぶイメージ＝運動＝物質から出
発して、知覚イメージ、感情イメージ、行動イメージを通過しながら、ドゥルーズはしだいに
生のイメージ、人間的時間のイメージの圏内に入っている。それなら彼のイメージと映画の
理論において、中心化されない物質の次元は、いかに生と人間の別の次元を裏打ちしてい
ることになるのか。彼のベルクソン主義にかかわって、どのようなタイプの襲が、時間イメ
ージの中に圧縮されているのか。

ポール=アントワーヌ・ミケル(ニース大学、フランス)

「神的な人類」

1932年、ベルクソンは最後の著作『道徳と宗教の二源泉』を執筆する。そこで語られてい
るのは「宗教的なもの」であるが、さらにまた、「神秘的魂」を通じて、明確かつ直接的に
「神」が語られている。つまり、人間の文化性におけるもっとも精神的なものが問題となっ
ているのだ。神は人間たちからの愛を獲得することがあるが、それは神自身が人間に対する

愛であるからである。魂はもはやそれ自身へと連れ戻されるのではなく、魂のうちで活動している神へと連れ戻される。われわれはいかにしてそこに到達し、そしてそれはいかなる理由においてなのか。

浅薄な理解をする者であっても、そこにベルクソンが事実そうであった姿のしるしを見ることになろう。すなわち、最終的には哲学を宗教的信仰とその釈義のうえに据えることを望んだ精神主義的思想家という姿である。ここで問題となっている神は、もはや『創造的進化』で言われる形而上学的神——それは、生物の精神的次元を名指すもう一つの名である——ではない¹。ここで問題となっているのは、良き知らせをもたらした者たちによって、そして福音書のキリストによって啓示された神である。それゆえベルクソンは、自分自身の原則に背いているように見える。諸事実から、あるいは「事実の系列(lignes des faits)」から出発して哲学を行うというよりむしろ、彼はここで、教義として硬直化し制度化された信仰から出発しているのである。宗教的な信はつねに、あるいはたいていの場合、教義に立脚している。すなわち、理性の名において異議を申し立てられることで苦しむことのないような一つの真理に立脚している。これらの教義のなかで、カトリック教をしつらえている教義はもちろん、取るに足らないようなものではない。それどころかわれわれは進んでその教義を、さまざまなおぞましい対立についてのあまねく血なまぐさい証人と見なしてもよいだろう。ベルクソン自身もそのことを喚起している。「神性」はいつも、「背徳に対して、あるいは罪に対してさえ、怒る」ことなどまったく気にかけていなかった、という(217)。そして神秘的経験は、哲学者に「決定的な確実さ」(263)をもたらすことはできない。宗教的なものの自然的な場所は、それゆえ、真なるものというよりはむしろ「真らしいもの」——この語は何度も繰り返される——なのである。

しかしながらわれわれはまず、宗教的なものがまさに哲学者に対して第一の中心問題を出現させるということを見ていく。その問題とはすなわち、虚構 fiction および想話 fabulation の意味と価値である。もっとも、ベルクソンも記しているとおりに、あらゆる芸術作品も同様に虚構である。しかし問題となっているのは、不信の宙づりをともなった志向的な虚構なのである。想話に関しては事情が異なる。想話とは、一種の集団的な幻覚に他ならないからである。

次にわれわれが見ていくのは、ベルクソンが語る宗教的なものが、このような想話的な次元に甘んじていることはできない、ということである。神秘的経験と結びついた真らしいものの中には、真なるものの超克——あるいはむしろ自己超克——への要請のようなものが存在している。われわれは「真らしいもの」を、歴史上のさまざまな形態の神秘的経験の「裏付け」のしるしとして読解するのではなく(実際「真らしいもの」とはそういうものなのだが)、むしろ、単なる表側——その裏側が偽であるといったような——とは異なる仕方では真なるものを理解することへの要請として読解することになる。実際、神秘的経験は、それが「完全な神秘主義」と著者が呼ぶ形態を取るときには、もはやただの「感情」ではない。それはまた「意志」であり「約束」でもあるのだ。しかしこの「意志」は、哲学的ないし形而上学的直観——この「意志」はそれらと完全には一致しない——よりも遠くまで及ぶ。実際、直観が形而上学においては知性と結びついているとするならば、直観は神秘的経験においては「意志」の用語で表現される(46)。ここで「意志」という言葉によって、人間的主体が使用可能なただの意志する[＝望む]能力——人間的主体が道具として操ったり、あるいは人間的主体がこの能力の言わば実質であるといったような——を理解してはならない。むしろ問題となっているのは、神秘主義者の「魂の高揚」(212)とでも呼びうるものである。宗教的経験は、宗教制度のなかで、そして宗教制度を通して——それがどのような制度であれ——当然ながら「閉じた」ものとなる傾向を持っていたのだが、神秘主義者の「魂の高揚」によって宗教的経験は逆に「開かれた」ものとなるのである。

¹「かくしてわれわれは、『創造的進化』の結論をおそらくは乗り越えてしまっている」(272)。

この経験こそが、「生の跳躍の学説」へと導いた経験を言わば「延長する」(266)。前者の経験は後者の経験を言わば延長するのであるから、その「単なる補助手段」(266)——ベルクソンはそう主張しているのだが——となることはできないだろう。それはまた「個人的」かつ「例外的」な経験である(260)。しかし、それは何の経験なのだろうか。意志は行動する。ここで意志とは、活動の単なる可能性ではなく、活動による可能性の創出である。それは理念の経験ではなく、^{イデア}〈理想〉の経験である。理想は、直接的に観察することのできる事物ではないが、また単なる理念でもない。というのも理想は活動を方向付けるからである。とはいえ理想は、プラトンないしアリストテレスにおける〈善〉のような一つの目的ではない。ベルクソンは、理想についての目的的なものではない考え方を提供している。理想とは、知性が期待する未来に対するずれである。理想は、一つの「圧力」——それは未来によって過去へと連れ戻される一つの仕方である——であるかわりに、過去に対するずれとしての真の未来を出現させる。このずれをベルクソンは「希求」ないし「高揚」と呼んでいるのだ。そしてこのずれ、理想のこの約束は、ひとたび現在が展開されたあとで単に回顧的な仕方ですれと確認されるようなものではない。反対にこの約束は、現在それ自身の時点から、そして現在それ自身のうちで現実的に働いており、また同時に意識的、志向的、「反省的」であるのだ。この意欲は、どこまで人間的主体によって反省されうるのだろうか。これが、神秘的経験が提出されるこの理想の先取りによって提起される第一の問題である。われわれは、「新しいもの」が可能事の創出であるという考えをベルクソンのもとに見出すことに慣れてしまっていた。生物の水準においてすでに「新しいもの」は可能事の創出だったのだが、ここではまったく異なることが問題となる。生物は生と生の原則にすでに開かれていたのだが、生物は開在性という理想をそれとして自分自身に与えることはできないだろう。生物の生は単に生きられたものであり、それは決して真に意欲されたものではないのである。

この新たな次元はどのようなものなのだろうか。ベルクソンの答えは明確である。この次元、すなわち、神秘主義者が目指すこの理想とは、「人間的なもの」に他ならない。実際のところ、神秘主義者にとって「人類を根本的に変形させる」(253)ことだけが問題となっているのだとすれば、これは奇妙な目的、奇妙な次元である。というのも、神秘主義者たちが「自分自身にのみ従っている」こと、そして自分たちを指導する人々の権威を「揺るがす」ことを躊躇しなかったことが知られているとはいえ(262)、そこではもちろん「神的なもの」の方が期待されていたからである。通常、人類の根本的な変形は、政治的なもの、さらには政治理論家の手になるものとしてでしかありえないように思われている。それでは、ここで神秘主義者が政治的なものに取り替わることができるのは、いかなる仕方によってなのか。宗教ないし宗教制度の権威のもとに政治を据えることが問題となっているのだろうか。第二次世界大戦中にカトリックの宗教制度とその長が行おうとしたこと——むしろ行おうとしなかったこと——を鑑みれば、われわれはその方向に赴くことはできないだろう。そうではなく、ここで問題となっていることをはっきりと理解しなければならない。問題となっているのは、生物学的な意味も含めて自らを変えることができる人類なのだ。実際、われわれが見ていくように、「あらゆる道徳は生物学的な本質を持つ」とすれば、あらゆる自然宗教もまたそうなのである。下位知性的なあらゆる自然宗教は、「獲得形質の非遺伝性」に服するものとベルクソンが考えている、人間の根底的な欲求へと帰着する。社会がたとえ進化しても、これらの欲求は変化しない。かくして、いわゆる「文明」なるものがしばしばただの上っ面にすぎないということ、そして、われわれが、フランスの人類学者たちが信じさせようと望んでいるよりもはるかに「原始心性」に近いものであるということの理由が説明される。開在性という理想をこのように理想として捉えることは、それゆえ、人類という種の変形を巻き込むことに他ならないのである。この変形はいかなる秩序に属しうるのだろうか。ベルクソンの答えは明確である。「この目的が達成されるのはただ、理論的には起源に存在していたはずのもの、すなわち神的な人類が、最終的に存在する場合においてのみであろう」(253)。

人間的なものを根本的に変形することとは、宇宙が最終的には「神々を作るための機械」(338)として現れることができるような仕方で、人間的なものを「神的」にすることである。この文章はなにを意味しうるのか。

つまりは第一に、この文章は哲学的なものについて何を意味しうるのか。少なく見積もっても哲学と神秘主義の相互作用は錯綜しており、それによって真理の基準が強化されるよりもむしろ弱体化している状況で、いかにして、神秘主義に対する哲学の場所をより明確に位置づけることができるのか。

第二に、そのような定式はいかにして受け入れられるものとなりうるのか、そして、それはいかなるものを神的なものの概念として前提としているのか。この定式は、「創造された」事物としての人間存在が、伝統的な意味における「創造者」、すなわち超越的な力——たとえば自らの身体的・物質的な覆いを取り去る力といったような——を具えた「創造者」にもなることができるということを実際に前提としているのだろうか。そのときわれわれは、カトリック教における伝統的な寓話の数々に行き着いてしまうだろう。しかし、これらの寓話と結びついた神話におけるなものによっても、自然という〈偉大な〉書物が〈創造者たち〉を生み出すことができるということを理解することはできない。事態がかくありうるためには、神的なもの一つの現象、宇宙の機構によって生み出された(「作るための」)一つの効果である必要があるだろう。このような結論がベルクソンを神学的異端という甘美な土地に連れていくのだと言うだけでは十分ではない。しかしながら、これらの甘美な土地は形而上学的な正確さを自称することができるのだろうか。これが、本発表のなかでわれわれが回答することを試みる第二の問いである。(訳 藤岡俊博)

藤田尚志(九州産業大学)

「二つの生氣論的政治哲学:ドゥルーズか、ベルクソンか II」

本発表は昨年度シンポで行なった発表の続編であり、ドゥルーズとベルクソンの根源的な差異を、主に政治的な次元で突き止めようとするものである。中心点としての主体をもたない(見者がいわば生なき生を生きる)欲望機械の果てしない連結(結晶イメージがひたすら連結・切断されるセリエルで無調的な映画)がそのまま生命となるドゥルーズに対し、ベルクソンにあっては、超意識的な生命の流れ(個体的ではないとしても、この生命は主体的である)が機械までも生命化する——この二極性を生きる主体の問題は、政治的な次元においても決定的な重要性を持つ。本発表では、ドゥルーズが度々引用する「民衆が欠けている」というクレイの言葉を手がかりに、後期ドゥルーズと後期ベルクソンにおける生氣論的政治哲学の差異に迫り、そこから『創造的進化』から『二原泉』へと至る理路の解明に寄与することを目指す。

セッション6: 哲学とイマージュ(14:30-17:00)

檜垣立哉(大阪大学)

「記憶の实在——ベルクソンとベンヤミン」

この発表では、ベルクソンとベンヤミンが、相互的な関わりの希薄さにも関わらず、同時代のパリにおけるテクノロジー的な発見を背景に、イマージュを巡る形而上学な問題を、類似した論点を多く含みながら提示したことについて検討したい。その際に、ベルクソンのイマージュ論が、過去の実在への圧倒的な信に基づいていることと、ベンヤミンが「複製芸術」を主題にし、まさに過去のイマージュについての考察を行ったこととが、直接的ではないにしても、強い関わりあいをもつことを確認したい。採り上げるテーマは、ベンヤミンのアウラや「静止状態の弁証法」の議論がもたらす、ある種の自然史的なヴィジョンと、ベルクソンが「縮約」として述べる、自然史的なスケールに関わる創造的行為との連関である。ここか

らまさに、生命なアウラとしての生の進化が、ベルクソンの議論を超えて(一面ではドゥルーズのシネマ論などにも連関させるかたちで)論じることが可能になるのではないか。

ロッコ・ロンキ(イタリア・アクイラ大学)

「私生児的思考:創造的持続の形而上学におけるイマージュの役割」

「開かれた」全体が意味するのは「全体は与えられていない」ということである。ベルクソンはしばしば、とりわけ著作の重要な箇所、創造的持続という自らの思想の本質的な直観を読者に提示する際に、この表現を用いている。だがこの創造的持続、この「開かれた全体」の内在的構造はどのようなものだろうか。どのようにして「全体」の本質であるこの「開け」を考えたらよいのだろうか。要するに、どのようにして生命の飛躍(エラン・ヴィタル)を考えたらよいのだろうか。ベルクソンの答えは『ティマイオス』における場(コーラ)がどのように考えられるかという問題に対するプラトンの答えに類似している。現実的なものとの差異における潜在的なものを現れさせるためには、私生児的思考(logismós tis nóthos)が必要である。「夢のイマージュに似た」イマージュが必要である。ベルクソンの答えはデジャヴ現象(「偽再認」)に関する驚くべき記述の中に見られる。デジャヴが明るみに出すのは持続の根底で常に起こっていること、創造的持続の可能性の根拠が何であるかということである。回想へと二重化していく現在というこの厄介なイマージュを通して、出来事は感ぜしめるものとなる。異なったものの基底にありつつ、そのうちのどれでもない、現実態にある差異化がここに現われる。生そのものと相関的な再認のプロセスが止むとき、意味内容が破局したせいで、そしてそのおかげで差異化が現われるのである。

ジョン・マラーキー(ダンディー大学、イギリス) ※ビデオ・コンフェランス

「映画はベルクソンのものである」というドゥルーズの指摘は正しかったのか？

ドゥルーズは、「映画はベルクソンのものだ」と主張している。本稿が問うのは、

1. ドゥルーズがそのような主張をしたことは、正しかったのか？
 2. もし彼が正しかったならば、彼のその主張は正当な理由をもっていたのか？
- という点である。

これらの問いに答える中で、〈ドゥルーズはベルクソンに対し、ベルクソンのものであるというよりはドゥルーズ的であるよう強いたのだ〉ということを見れば見ることになるだろう。ドゥルーズが映画のイメージの潜在的(virtual)運動の考察のために映画機器の実際の運動を無視したのに対し、ベルクソンの態度はあらゆる運動の現実性に関わっている。この相違はまた、ドゥルーズが一般的に持っている、「出来事」を潜在的なものとして(それゆえ最も現実的なものとして)見る態度、つまり実際の運動を超えて他の場所に実在するものとして出来事を見る態度のうちにも見出される。ドゥルーズのこの見方に対し、ベルクソンはすべての運動は(そしてすべての出来事は)現実的だと考えるのだ。さらに、ベルクソンは「なぜいくつかの運動は我々の眼から消える(知覚不可能となる)のか」を説明する理論をも与えてくれる。それはそれらの運動が現実性が低いから(もしくは「より現実的」、潜在的でさえあるから)ではなく、政治的かつ形而上学的な行為のうちで、われわれがそれらの運動を抑圧する(suppress)からである。こうして、彼の抑圧の理論は、なぜベルクソンにとって映画がそれほどまでに重要なのかを、われわれに考えさせてくれる——ドゥルーズはその理由に対しては目をつぶっていたままに違いないのだ。(訳 森功次)